

平家物語（覚一本）における擬声語・擬態語

—— 意味内容からの考察 ——

中 里 理 子

平家物語に擬声語・擬態語が多いことは、平家物語の文体的特徴の一つとして、^{注1}山田俊雄氏を初めよく指摘され認められている事実である。文体的研究の多くは、どういう擬声語・擬態語があるかを挙げ、若干の例でそれらが効果的に用いられていることを示したり、擬声語・擬態語全体を一まとめにしてその特徴を考察するものであり、個々の擬声語・擬態語についての考察はあまり進んでいないようである。そこで、小稿では、平家物語の擬声語・擬態語のうち代表的なものを選び、それぞれについて、意味内容の面から特徴を考えていくことにする。

対象とするのは、平家諸本のうち最も一般的な覚一本（^{注2}日本古典文學大系『平家物語』上・下）とする。覚一本は、語り本系の代表的な一本で、文芸的価値から見て最も完成度の高い表現が見られると言われている。擬声語・擬態語についても、特徴ある使われ方が見られるのではないかと思われる。これに、読み本系の代表的な一本である延慶本（^{注3}吉沢義則校註『応永書写延慶本平家物語』）を適宜比較し、覚一本の特色を考えていく。

^{注4}猿田知之氏の調べによると、覚一本には延べ260の擬声語・擬態語があり、そのうち10例以上のものは、

き(っ)と(14) ざ(っ)と(20) さめざめと(12) ち(っ)と(24)
つ(っ)と(24) どうと^(ん)(10) ど(っ)と(20) はらはらと(32)
む(ん)ずと(17) ()内は例の数。以下同じ)

の九つである。延慶本には延べ^{注5}248の擬声語・擬態語があり、上記九つの語の例数は、

き(っ)と(10) さめざめと(21) ち(っ)と(9) つ(っ)と(31)
どうと^(ん)(4) ど(っ)と^{注6}(4) はらはらと(21) む(ん)ずと^{注6}
(12)

となっており、「ど(っ)と」「どうと(ん)」以外は、延慶本においても多く使われる語となっている。猿田氏によると、延慶本では「ざ(っ)と」が数えられていないが、「ざ(っ)と(32)」の中に「ざ(っ)と」が含まれているようなので、以上の九つに「ざ(っ)と」(覚一本では8例)を加え、十語を候補にあげた。が、このうち「さめざめと」「はらはらと」の二語については、^{注7}勝山幸人氏が覚一本における用法を細かく考察しておられるので、ここでは、この二語を除く八語についての考察結果をまとめてみたいと思う。

○ 「き(っ)と」

覚一本で「き(っ)と」は大きく二通りの使われ方をしている。一つは、「見上ぐ」「見まわす」「見る」「見分く」「思ひ出づ」「(舟を)さしもどす」などの語を修飾して、「すばやさ」を表す使われ方である。

- ① ……經正、幼少にては仁和寺の御室の御所に、童形にて候はれしかば、かゝる忽劇の中にも其御名残き(っ)とおもひ出て、侍五六騎めし具して、仁和寺殿へ馳まいり… (巻七 經正都落)
- ② ……あはれ、たすけてたてまつらばや」と思ひて、うしろをき(っ)とみければ、土肥・梶原五十騎ばかりでつゞいたり。(巻九 教盛最期)

日本古典文學大系(以下『大系』とする)の解説では、①「サッと思いついて」②「さっとみると」と書いてあり、動作が素早く行われることを示している。さらに、②のような「見る」動作の場合には、すばやさに加えて目つきの鋭さを感じられ、①のような「思ひ出づ」にかかる場合は、「ほんやりと」ではなく「鮮やかに」思いつく・思ひ出すようすが感じられる。「き(っ)と」は、すばやさとともに鋭さを表す語ではないかと思われる。

もう一つの使われ方は、「き(っ)と～せよ」という命令形を取って、「必ず～しなさい」という強い意味を表すものである。『大系』では「動作が確実に行われることを表す語。まちがいをなく。」と解説されている。

- ③ 太政入道まづ雑色をも(っ)て、中御門烏丸の新大納言成親卿の許へ、「申合べき事あり。き(っ)と立より給へ」との給ひつかはされたりければ……(巻二

西光被斬)

- ④ 法皇大に驚きおぼしめし、……其比はいまだ鶴藏人とめされけるをめて、
「この占形も(つ)て、泰親がもとへゆけ。き(つ)と勘がへさせて、勘状をと(つ)て
まいれ」とぞ仰ける。(巻四 馳之沙汰)

「きっと」が確実な動作を表す使われ方は、平家以外にももちろん見られるが、
覚一本にある例が全て命令形になっていること、しかも、七例とも、法皇・入道
・天皇という強力な権力者の至上命令に用いられ、強い確実性を要求するのに使
われている点は、覚一本独自の特色であると考えてよいだろう。

後者の使われ方は、時代が下るに伴い擬声語・擬態語としての音象徴性が徐々
に薄れ、情態副詞から陳述副詞へと移行していく流れの上にあるもの、つまり、
現代語の「彼はきっと来るだろう」「きっと来てね」という表現につながるもの
と考えられる。しかし、覚一本の七例に見る限りでは、命令表現の中で、話者の
確信ではなく、相手に要求する動作に直接係ってその確実さを表しており、陳述
性より情態性の方が強いと言えるだろう。

延慶本での「き(つ)と」の使われ方も、覚一本と同様であるが、後者の使われ方
は少なく、すばやい動作の形容となっている例が多い。

○ 「さ(つ)と」「ざ(つ)と」

「さ(つ)と」もすばやい動作を表す語であり、「嵐の木の葉のちるやうに、庭
へさ(つ)とぞおりたりける(巻四 信連)」「さ(つ)とひかり(巻六 祇園女御)」「
(射られた扇が一旦空へ上がり)海へ^{注8}さ(つ)とぞち(つ)たりける(巻十一
那須与一)」などの例では、あたりにすばやく広がる状態を形容している。そ
の他覚一本の特徴としては、人の動作に使われる時には、怒りを表す激しい勢
いのある様子を表していることがあげられる。

- ⑤ 「あなあさまし。人あまた承候ぬ。只今もれきこえて、天下の大事に及候
なむず」と大にさはぎ申ければ、新大納言けしきかはりて、さ(つ)とたゝれけ
るが、御前に候ける瓶子をかり衣の袖にかけて引たうされけるを……(巻一
鹿谷)

- ⑥ (入道)「あなにくや。此うへをば何と陳すべき」とて、大納言のかほに

(白状を) さ(っ)となげかけ障子をちやうどたててぞ出られける。(巻二 小教訓)

先の「さ(っ)とぞおりたける」は、「木の葉のちるやうに」という比喩があり、人の動作というより、「葉」という物の形容にひきよせられていると思われる。覚一本の「さ(っ)と」の中に一例、異質なものが混ざっている。

⑦ 十郎藏人行家五百餘騎でおめいてかく。一陣越中次郎衛盛嗣、しばらくあひしらう様にもてなひて、中を さ(っ)とあけてとをす。(巻八 室山)

『大系』では「さ(っ)と」になっているが、『注⁹ 平家物語総索引』では「ざ(っ)と」の項に入っており、注¹⁰ 熱田本・天草本では「ざ(っ)と」になっている。次の「ざ(っ)と」の項でその特徴を見た後、もう一度これについて考えてみる。

延慶本は「さ(っ)と」が32例となっているが、覚一本のような「すばやい」形容に使われる例は少なく、残りは次で考察する「ざ(っ)と」になると思われる。

「さ(っ)と」であると思われるものは、覚一本の使われ方と同様のものと、他に「血がこぼれかかる」「涙が浮かぶ」例がある。また、人の動作に使われる場合、怒りを含まないものがあるが、やはり「大太刀を さ(っ)と抜とそみる(巻四 十、平家の使宮の御所に押寄事)」のように、すばやさと同時に勢いの激しい形容となっている。

「ざ(っ)と」は大まかに分けて、海・河川に入る・渡る(10)、旗を上げる(4)、戦の時に軍兵が一度に動くさま(5)、その他(1)に分けられる。それぞれの例をあげてみよう。

⑧ 宇治河はやしといへども、一文字に ざ(っ)とわたいてむかへの岸にうちあがる。(巻九 宇治川先陣)

⑨ …あひ圖をさだめて、七手がひとつになり、一度に時を ど(っ)とぞ作ける。用意したる白旗 ざ(っ)とさしあげたり。(巻六 横田河原合戦)

⑩ 平家の侍共手いたうかけられて、かなはじとやおもひけん、城のうちへ ざ(っ)とひき、敵をとざまにないてぞふせぎける。(巻九 一二之懸)

⑪ 三位中將馬にうちの ど(っ)ていで給ふが、猶 ひ(っ)かへし、梶のきはへうちよせて、弓のはずで御簾を ざ(っ)とかきあげ、……(巻七 維盛都落)

⑧は河をざぶざぶと渡るようす、⑨は兵が一斉に音高く、威勢よく旗をあげるようす、⑩は侍共が城の内側へどっと走りこむようす、⑪は興奮しているままに御簾をぱつとあげるようすとなっている。これらの例に見るように、全20例のいずれもが、勢いのある動作とともに、その音を表しており、これは、平家あるいは軍記物語独特の用法であると思われる。また、20例中12例までが、複数の兵士達の動きに使われていることにも注目したい。何百騎もの兵が河を渡る、旗をあげる、一度に動く。こういう戦乱に欠かせない大人数の勢いというものが、さらに、その場面の音響効果が、「ざ(づ)と」という擬声語によって実にうまく表わされている。特に、例⑪のような動きは軍記ならではの使われ方で、兵をひく(3例)、山・谷から兵が降りる(2例)となっている。先の例⑦は、まさにこの軍兵の動きにあたるだろう。行家の兵五百餘騎を通すために、一陣の兵二千騎がざつと二つにわかれるのである。⑦は、「ざ(づ)と」に分類されると考えてよいだろう。

延慶本では、「さと」「さつ」と表記されるものの中で、覚一本の「ざ(づ)と」の例に見るように、海・河川へ入る・渡る場面、軍兵が一度に「あけてとほ」したり、「引」いたり、「おりかさな」ったりする場面に使われているものが多く見られ、これらは「ざ(づ)と」と読むものと考えてよいと思われる。延慶本の方では、覚一本よりも例⑪のような軍兵の動きが多い。

なお、覚一本においても、例⑧のように、高野本等では「さと」になっているものに、西教寺文庫本、龍門文庫本では「颯」と書かれ、平松家本では「雑ト」と傍書されている例もあり、「さ(づ)と」か「ざ(づ)と」か確実な判断は下せないのであるが、今考察したように、「さ(づ)と」はすばやい形容、「ざ(づ)と」は音響を伴う特色ある使われ方することから、『大系』の読みに従いたいと思う。

○ 「ど(づ)と」

「ざ(づ)と」同じく、戦乱の音響効果に重要な役割を果たしている。

- ⑫ 猪熊堀河のへんに、六波羅の兵ども、ひた甲三百余騎待うけ奉り、殿下をなかにとり籠まいらせて、前後より一度に時をど(づ)とぞつくりける。(巻一 殿下乗合)

20 例中 14 例が、⑫のような関をつくる声なのである。残る 6 例は、次の例のような群集の笑い声の形容となっている。

⑬ …或夜おほ木のたふるゝ音して、人ならば二世人が聲してどつとわらふことありけり。(巻五 物怪之沙汰)

特に延慶本と比べ、覚一本に関をつくる音としての例が多いことは、注目してよいだろう。延慶本では関をつくる場面で擬声語を使うことは少なく、4 例しかない。そのうち「とゝ」(どつと)が 2 例で残り 2 例は「はと」を使っている。

⑭ …六十餘騎の軍兵かやうにし散して悦の時をはと作て六波羅へ歸りにけり、入道はゆゝしくしたりと被感けり、……

(巻一 十六 平家殿下に耻見せ奉る事)

「はと」は、延慶本には 12 例と数が多く、覚一本の「どつと」の使い方にあたる用例が多い。(12 例中、2 例が関の声、8 例が笑い声。残り 2 例は、「(兵が)押し寄す」「調子はとそ興さめにけり」で、覚一本の「は(と)」と「ば(と)」の用法に準じている。)

○ 「どうと^(ん)」「む^(ん)ずと」

覚一本において「どうと^(ん)」と「む^(ん)ずと」は組で使われることが多い。

⑮ 倉光馳來て、おしならべむずと組で、どうどおつ。互におとらぬ大力なれば、うへになり、したになり、……(巻八 妹尾最期)

「むずと組でどうど^(ん)おつ・臥す」という表現が覚一本には 5 例見える。この 5 例以外にも「むずと」は「(袖・体を)ひかえる」「組む」「つかむ」「取る」「とりつく」「のる」というように、何かに力をこめてつかみかかる例がほとんどで、わずかに一例、「むずときる」という使われ方がある。これは覚一本の特徴ともいえるもので、延慶本では、「取る」「組む」「おさへる」で 5 例となっており、「つかみかかる」例の方が少ない。また、「むずと」と「どうと^(ん)」がともに使われている例は、一例もない。「むずと組でどうど落つ」という、平家の中でもよく知られた言い回しは、覚一本では特徴となるが、少なくとも延慶本には見られないのである。

延慶本では「むずと」は、他に「(刀を)合す」「(門を)あける」「引あを

のける」「胸を(足で)ふむ」「きる」「(太刀で)打つ」「(座に)つく」という語に係っており、つかみかかる動作に限らず、力強い動作に幅広く使われている。

覚一本・延慶本ともに、「むずと」動作する人物が屈強の大力の者である場合がほとんどであることを、つけ加え指摘しておきたい。

「どうと^(㉟)」は、覚一本では、先のように「むずと」とともに使われる以外にも、「落つ」「たふる」「け入れる」という落下の動作を表す語に使われている。いずれの使われ方にも、勢いよく落ちていくさまと同時に、それに伴う音を表しているように感じられる。この語もまた、「ざ(㉞)と」「ど(㉟)と」にならび、音響効果の役割を担っているように思われる。

「どうと^(㉟)」に関しては、延慶本では4例と少なく、使われ方は「落つ」「倒る」に係っていて、覚一本と同じと考えてよいだろう。

「むずと」「どうと^(㉟)」は、どちらも人並優れて大力の者に使われる例が多く、ふつうの言葉では言い表せない力強さ、豪快さを表す擬声語・擬態語として、武士の姿を生き生きと伝えている。そこには、多分に武士の力強さ・豪快さを称讃する意味がこめられているように思う。

延慶本は、「ど(㉟)と」「どうと^(㉟)」「むずと」の三つが、覚一本に比べてかなり少ない。これら力強さを表す擬声語・擬態語が少ないことは、延慶本と覚一本の性質の違いにつながる問題であると考えられ、今後、諸本を擬声語・擬態語の観点から比較検討する際に役立てたい。

○ 「つ(㉞)と」

「つ(㉞)と」は、覚一本、延慶本ともに多く見られる語である。

⑯ 五郎は生田森にありけるが、是をみてよ(㉞)びいてひやうふつとみる。河原が鎧のむないたうしろへつ(㉞)とみぬかれて、弓杖にすがり、すくむところを……(巻九 二度之懸)

⑰ …よ(㉞)びいてひやうどある。手ごたへしてはたとあたる。「ゑたりをう」と矢さけびをこそしたりけれ。井の早太つ(㉞)とより、おつるところをと(㉞)て

おさへて、つゞけさまに九かたなぞさいたりける。(巻四 鶴)

⑯のように<矢>に係るものが5例あり、放たれた矢のスピード感、射ぬくときの鋭さが感じられる。残る19例は、⑰のような<人の動作>に係っているが、この場合も<矢>と同様、直線的な速さを表しているようである。⑰の「よる」の他に、「参る」「出づ」「走出づ」「出で來」「走りとほる」「とほる」「はせぬく」「こぎよす」「のがる」「(海へ)入る」に係っており、「寄る」「出づ」「参る」というような進行の動作が多いことは特徴の一つである。

これらの動作は、いずれも「つ(と)」により、機敏さ・すばやさが増えられており、この特徴が、武芸に秀でた者の長所として讃えられているように感じられる。例えば、次にあげる場面では「つ(と)」のこの特徴がよくいさされている。

⑱ (能登殿は)つゞいてよる安藝太郎を、弓手の脇にと(と)てはさみ、弟の次郎をば馬手の脇にかいばさみ、ひとしめしめて、「いざうれ、さらばおれら死途の山ともせよ」とて、生年廿六にて海へつ(と)とぞいり給ふ。(巻十一 能登殿最期)

この場合、海へ入るという描写には、「ざ(と)」が使われてもよいわけだが、「ざ(と)」ではなく「つ(と)」を使うことによって、能登守教経の機敏な動作、潔さ、そのかっこうのよさ、スマートさが、よく描かれており、読者に深い感銘を与えるのである。

また、「つ(と)」には、身分の下の者が上の位のため「参る」「いでく」などの例がいくつか見られる。

⑲ …主上はいまだ夜部の御座にぞ在ましける。「南に翔り北に嚮、……」と、うちながめさせ給ふ所に、仲國つ(と)とまいたり。小督殿の御返事をぞまいらせたる。(巻六 小督)

これも、武士として仕えるものの美徳であるすばやさ、つまり武士としての有能さを表しており、先の能登守のスマートさと同じなのである。

延慶本においても、<矢>に係るものはごくわずかで、ほとんどが「寄る」「出づ」「入る」などの進行の動作に係っており、やはり、スピード感・機敏さ・スマートさを加えているようである。

平家などの軍記物語では、「むずと」などの力強い動作を表す擬声語・擬態語

がよく取り上げられるが、「つ(つ)と」など武士の機敏さを表す擬声語・擬態語も数多く使われ、躍動感を増す役割を果たしていることも、軍記物語の大きな特徴として認められてもよいのではないだろうか。

なお、『^{注11}義経記』の中に

- ⑩ 「これこそ弁慶よ」とてつとと寄る。(巻四 土佐坊義経の討手に上る事)
⑪ 太刀打かたげて縁の板をがはと踏みて荒らかにつとと入。(巻五 忠信吉野山の合戦の事)

などのような「つと」という表現が見えるが、覚一本・延慶本にある「つと」の中に「づと」(または「づんと」)という濁音のものがあるかどうかは、今後の研究課題としたい。

○ 「ち(ち)と」

笛を鳴らす擬声語かと考えられているものが一例ある。

- ⑫ ありがたふおほえて、腰よりやうでうぬき出し、^(横笛)ちととならひて、門をほとほととたゝけば… (巻六 小督)

『大系』では、「笛をピーと吹いた。「ちと」はちよつとの意味ではあるまい」と解説されている。他の語にも見られた音響効果という点から考えて、『大系』の説は妥当ではないかと思われる。

この例以外は全て、「少し」という意味で使われているようだが、「ちと」が「少し」同様程度副詞と考えられるかどうかは、簡単に判断を下せない。

- ⑬ …無下におさなきをば水に入、土に埋み、^ち少おとなしきをばおしころし、さしころす。(巻十二 六代)

⑭の場合は、程度副詞かとも思われるが、次のような例はどうであろう。

- ⑮ 暁がたに、康頼入道ちととまどろみたる夢に、おきより白い帆かけたる小船を一艘こぎよせて…(巻二 卒都婆流)
⑯ …おし分てまいる程に、右の沓を踏みぬかれぬ。そこにてちとと立やすらふが、冠をさへつきおとされぬ。(巻三 公卿揃)
⑰ …文覚がかたなもちとたるかいなをしたゝかにうつ。うたれてちととひるむところに…(巻五・文覚被流)

㉔のように「まどろむ」に係るものが5例ある。延慶本にもいくつか見られ、慣用的な表現になっているとも考えられる。が、㉕㉖の例とあわせて、単に「少し」という程度だけでなく、「ふっと～する」というような動作の情態性を表しているように感じられ、音象徴をもつ擬態語と考えるとよいのではないだろうか。

その他、覚一本の大きな特徴は、「ちとも～ず(打消の語)」の形で使われている例が14例もあり、そのいずれもがある特定の場面で使われていることである。

㉗ 西光もとよりすぐれたる大剛の者なりければ、ちとも色も變ぜず、わろびれたるけひきもなし。(巻二 西光被斬)

㉘ …いくらもなみ居たる人々、「あなおそろし。入道のあれ程いかり給へるに、ちとも恐れず、返事うちしてたゝる事よ」とて法印をほめぬ人こそなかりけれ。(巻三 法印問答)

㉙ …安藝太郎家光とて、卅人が力も(剛)たる大ぢからのかうの者あり。われにちともおとらぬ郎等一人、おとゝの次郎も普通にはすぐれたるしたゝか物なり。(巻十一 能登殿最期)

㉗㉘のように「ちとも」～「色も變ぜず」「さわがず」「恐れず」(以上7例)の形で描写される人の落ち着きはらったようす、度胸のあるさまを讃える例が目につく。㉙のように「ちともおとらず」の使い方は、プラスの評価を表している。(4例)また、「ちともおほれず」「(毒虫がさしくいなどしても修行のために)ちとも身をもはたらかさず」、あるいは、

㉚ ともゑそのなかへかけ入、をん田の八郎におしならべ、むずとと(つ)てひきおとし、わがの(つ)たる鞍のまへわにをしつけて、ちともはたらかさず、頸ねぢき(つ)てすてて(つ)げり。(巻九 木曾最期)

のような使い方でももゑの強さを表すなど、いずれも<誉める>場面、プラスの評価がされる場面で使われている点は、覚一本の特色として注目されてよいだろう。

延慶本では、「ちとも～打消」の例が1例だけあるが、覚一本の使われ方とは違って一般的な使われ方をしている。

㉛ 新中納言父子本三位中將重衡二千餘騎にて梶原を中に取こめて戦けれとも、

一時計戦けるにちともしらけさりけるか、さすか無勢なりければ梶原係たてられて引退けるか…(卷九 源氏三草山拜一谷追落事)

延慶本の他の8例は、覚一本の「ほんの少し」という意味で使われている例(㉔～㉘)と同様である。

以上、八個の擬声語・擬態語について、意味内容の面から考察してみた。八個とも、数の多さという点で選びだしたのだが、それぞれに覚一本の特色ある使われ方が見られた。「むずと」「どうと⁽ⁿ⁾」という力強さ・豪快さを表している語とともに「き(と)」「さ(と)」「つ(と)」という、すばやさ・鋭さ・機敏さを表す語を多く使うことにより、武士の特質の二つの面を物語の中によく描き出しているのではないだろうか。特に、「つ(と)」の効果的な使われ方は、平家の人物像の描写に色を添えていると思われる。また、「き(と)～命令形」「ち(と)も～打消」「む(ん)ずと組でどうと⁽ⁿ⁾落つ」というような、型にはまった表現が見られるのも、覚一本の特徴の一つである。「ざ(と)」「ど(と)」「どうと⁽ⁿ⁾」など、戦乱の場面に使われる擬声語が覚一本に多かったことは、「ひ(は)ふと」「ひやうずばと」「ひやうふつと」「ひやうど」「ふつと」という矢音の表記の多様性とあわせて、他のジャンルとは違った、軍記物語の擬声語という点から考えてみたい問題である。注¹² 延慶本等読み本系では、矢音表記、水音など、全般的に擬声語が乏しいと言われるが、そのなかでも「ど(と)」と「はと」の関係のような、微妙な意味用法の違いについて検討することも必要であろう。

— 了 —

- 注 1 「平家物語の文法」明治書院刊『日本文法講座 4 解釈文法』所収
昭 33
- 2 岩波書店
- 3 改造社 昭 10・2
- 4 「平家物語に現われた音象徴詞の性格」立教大学日本文学 35
昭 51
- 5 猿田氏の調べでは 248 例であるが、「ど(と)」と「む(ん)ずと」の例が
1 つずつ多く見つかっており、250 例以上になると考えられる。
- 6 猿田氏の調べでは「ど(と)」3 例、「む(ん)ずと」11 例。
- 7 「覚一本平家物語の文章法 — 『さめざめと』と『はらはらと』 —」
國學院大學大学院文学研究科論集 12 号 昭 60・3
- 8 百二十句本では「ざと」になっている。
- 9 金田一春彦他。学習研究社 昭 48
- 10 小学館『日本古典文学全集・平家物語(2)』P 158 の表による。
- 11 岩波書店『日本古典文学大系 義経記』
- 12 梶原正昭「軍記物語の擬声語 — 矢音の表記を中心として —」
国文学研究(早大) 76 昭 57・3